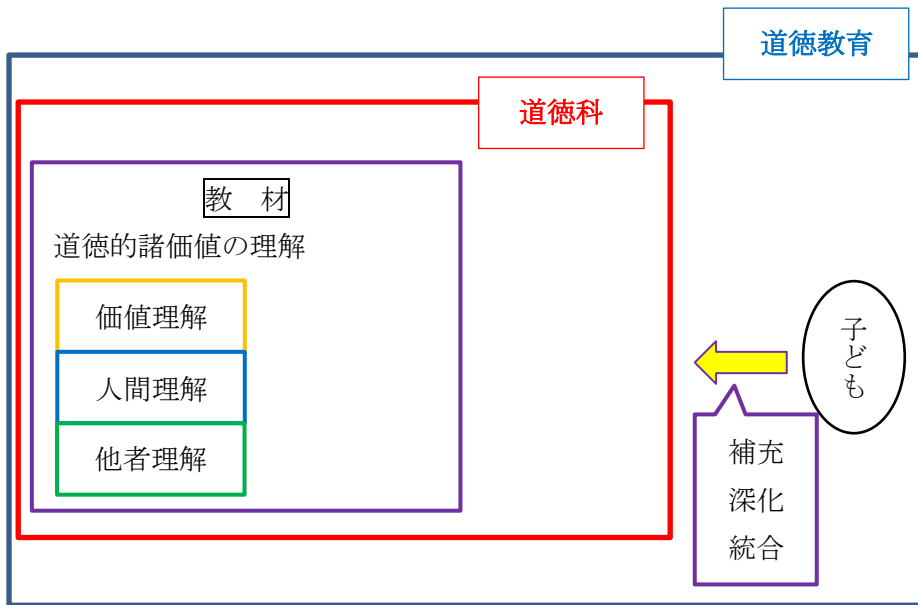
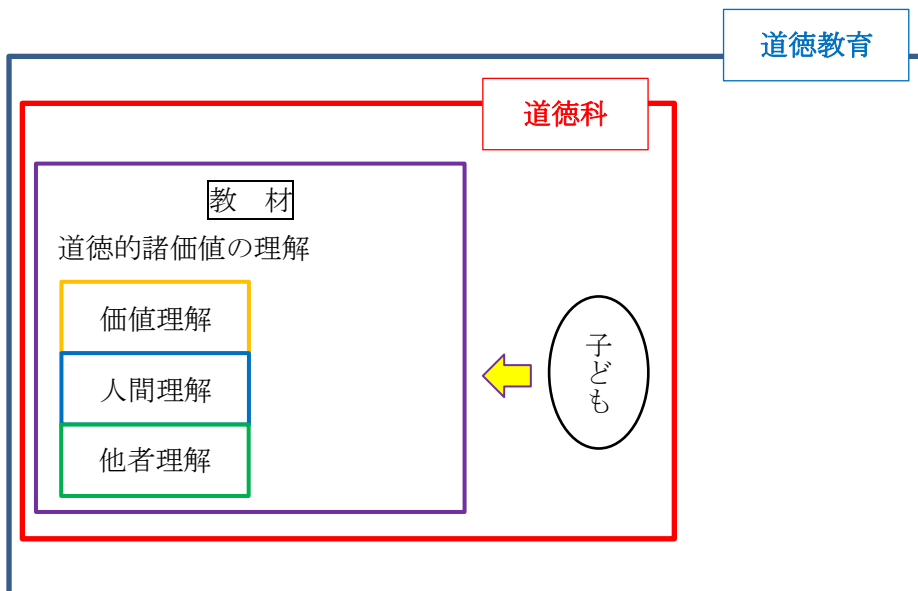




子どもは、日々、学校や家庭、地域での生活において、道徳的な様々なことを考えたり思ったりしている。「運動会は、協力して大成功だ。」「よくないと思っけていても言い出せない。」「計画を立てても、途中でやめてしまった。」・・・

そういった中でも、考えたり思ったりしない道徳的価値について補って学習したり、考えたり思ったりしたことを道徳的価値に照らして意義や意味を考えたり、道徳的価値と他のそれとのつながりに気づいたりすることを、教材を通して見つめ直す時間として、道徳科が位置づいています。

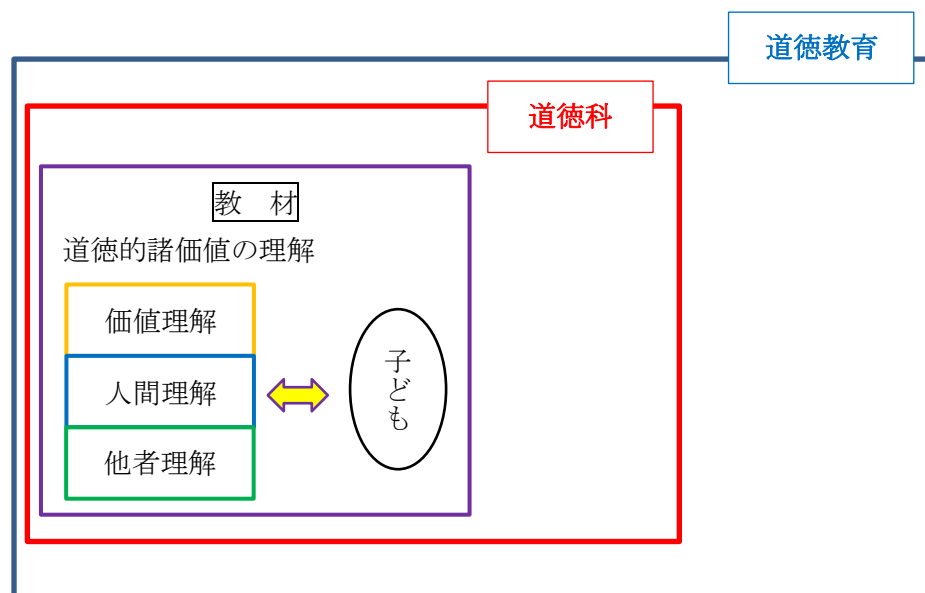


道徳科の学習に、子どもがより主体的に臨むことができるようにするために、「導入」があります。「導入」には4つの方向があります。

- 教材に向かう
- 経験に向かう
- 道徳的価値に向かう

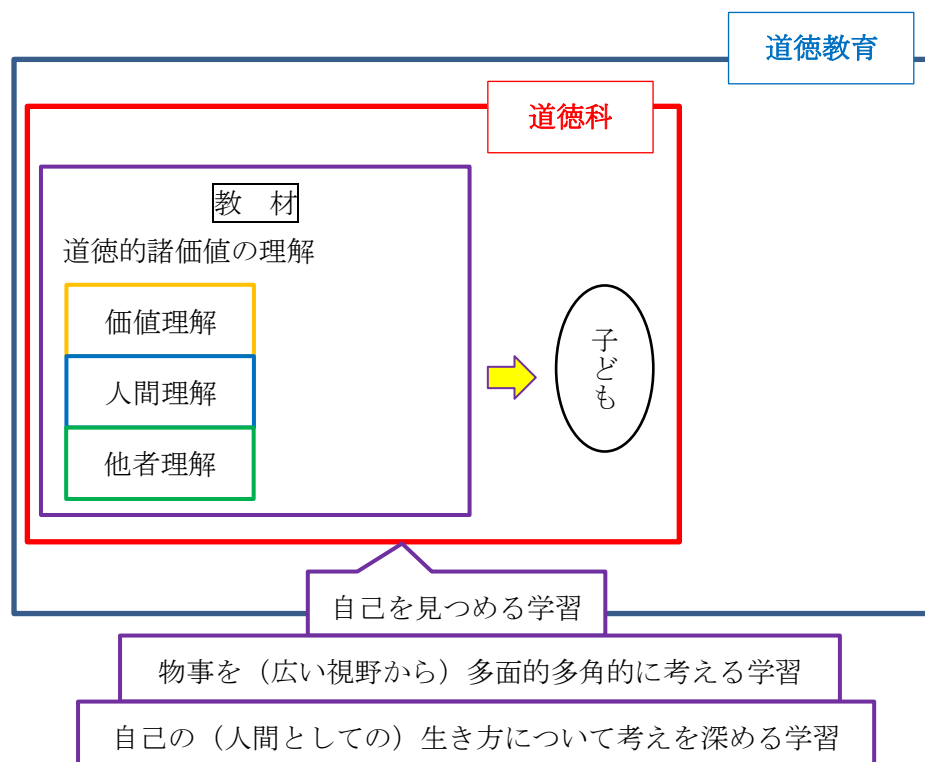
○問題解決的な課題の提示

いずれにしても、「展開後段」または「終末」で、授業者が切り出した「導入」に関わる問いを立てるなどの場の設定が重要だと考えています。



教材の中には、人が生きる上で大切なものの見方や考え方、感じ方が含まれてあり、また、それが、少し変わると様々な見方や考え方、感じ方ができることも含まれています。さらに、よいことをした時の喜びや、できなかった悲しみや辛さ、苦しさなど、日々、私たちが経験するような考え方や感情があります。

子どもには、それらがお話の世界だけのものではなく、自分の心の中や生活との関わりの中で、向き合わせることが大事です。

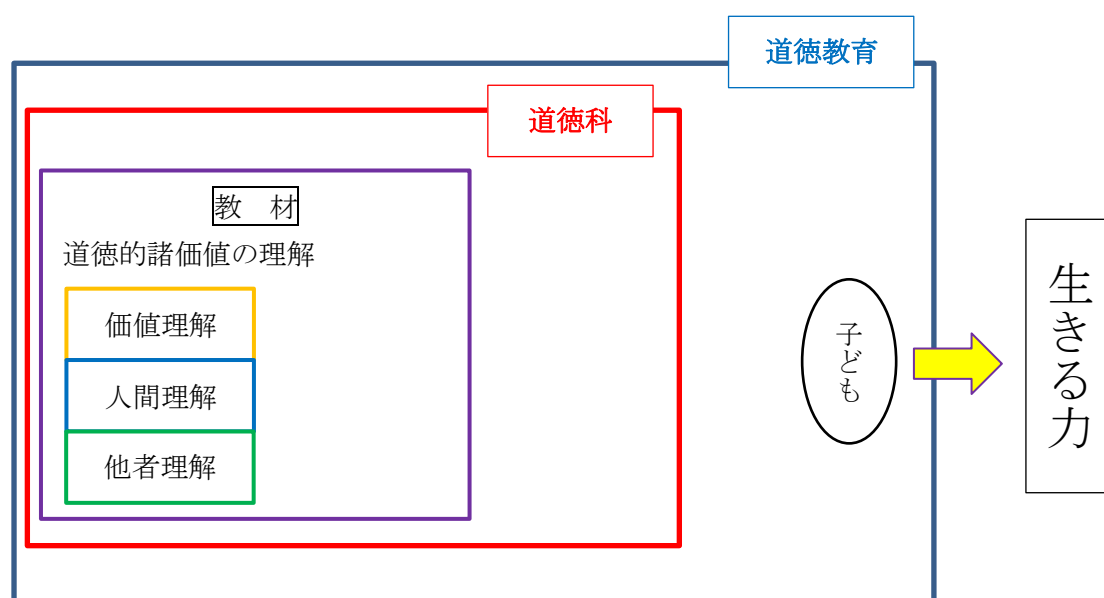


教材の場面は、子どもの生活を切り取った、ある一場面でしかなく、教材によっては、子どもが経験したことがない、また、これからも経験しないであろう場面を扱っています。教材の中だけの学習に終始すると、子どもが、将来、出会うであろう、星の数だけの様々な教材を学習しないといけないことになります。

つまり、教材で学習した大切なものの見方や考え方、感じ方を、さらに、子ども一人ひとりが、(小学校では)在りたい自分の考え方や姿を考える価値観にまで、(中学校では)人として在るべき考え方や姿を探究する価値観にまで広げ、それを鏡として自己を深く見つめる時間が重要であると考えます。

これまで、教材の中の中心的な発問のあり方が重要視されてきた傾向がありましたが、このような、在りたい、在るべき見方や考え方を見つめる展開後段から終末に十分な時間をかけるべきだと考えます。

道徳科における学習は、常に、子どもが、自己との関わりにおいて見つめ、物事を広い視野から多面的多角的に考え、自己の、あるいは人間としての生き方について考えを深める、主体的で、対話的で、深い学びにつながる学習を目ざしていきたいものです。



自己の、あるいは人間としての生き方について考えを深めた子どもは、学校や家庭、地域においての様々な学習や体験の中で、新たな価値観を基に自己を見つめ、よりよく生きていこうとします。その結果、よりよい行為ができたときの喜びや達成感、それでもできなかった挫折感、また、新たな価値観に出会ったときの驚きなどをもって生活を続け、それが、よりよい生き方を目ざす「自分探しの旅」を進める力、「生きる力」をはぐくむことになるのです。